

日本は外国人が普通に暮らす「多文化社会」へ移行しつつある。お互いの背景にある文化や価値観を尊重し合うことは言うまでもない。しかし、同じ社会に生きるには、さらに踏み込んだ相互の関わりが必要なのだと考える。2つの点から考えてみたい。

まず、相互に理解し合うことや尊重し合うことの先に、「相互に学び合う」という行動が必要になると私は考える。日本は少子高齢化が急速に進行し、人口減少社会に突入している。自治体が消滅する可能性が語られる一方で、都市部では労働力不足の解消策として外国人労働者の受け入れ拡大が検討されている。外国人はこれらの日本の社会が抱える問題を解決する糸口を与えてくれるのではないか。

例えば、最近ではイスラム教の文化圏の出身者のために豚由来成分を抜いたハラールフードが広まり、礼拝のためのモスクが増えているという。これらは異文化の理解が行動に移され、地域に受容された事例と言えるだろう。さらに進んで、私たちは異なる文化圏での互助や街づくりの仕組みを彼らから学べるかもしれない。

次に、多文化社会を有効に機能させるには、お互いの文化の存続が前提になっているという点だ。日本では地域社会が疲弊するにつれ、伝統文化や農山村の風景が消えつつある。後継者がいない。耕作放棄地が増えた。村祭りが途絶えた。日本独自の「文化」があってこそその「多文化社会」のはずなのに、肝心の日本の文化の勢いは衰退している状況だ。

「多分化社会」に生きながら、私は足下の多くのことに気づかされる。日本には古代からアイヌ民族が暮らし、渡来人が移り住み、戦中戦後には多くの在日外国人が移住してきた。実は日本はもともと多文化社会であり、いま異文化の要素を採り入れて社会を再構築しようとしている段階にいるのではないか。「多文化社会に生きる」とは、そのような歴史的過渡期にいるという自覚を持って生きていることなのだろう。